

2月の初め、いつものようにロビーで教科書を読んでいると、友達が話し掛けてきました。彼曰く、「俺がおまえの立場だったら、残りの1ヶ月は遊びまくるぞ。」と。彼に日本の大学生が今何をしているのか、そして帰国後、私が大学院に進むことを説明すると納得してくれました。ついに最後の月が来てしまいました。最後の報告書は以下の3項目について報告します。

1. Online Course Evaluation
2. Winter Quarter 履修科目の様子
3. 派遣留学の感想

1. Online Course Evaluation

ローズ・ハルマンでは、学期末に授業の評価が行われます。内容はちょうど工大の自己点検と似ていますが、こちらは授業に対する評価のみとなっており、自己評価の項目はありません。昨年までは、ちょうど工大の自己点検授業のように授業中にシートに記入していたのですが、今年からはウェブ上から授業の評価が出来るようになりました。これにより、学生はいつでも都合の良い時間に授業の評価を行なうことが出来ます。このウェブページへは、期末テスト前の1週間だけアクセスできます。

Online Course Evaluationの質問項目は、Learning、に分かれており、それぞれ5から8ほどの項目について答えていきます。セクション毎の最後にはコメントを書く欄があります

このOnline Course Evaluationは、授業評価に授業時間を割く必要がなく、学生が好きな時間に落ち着いて評価できるという長所がある反面、評価は学生の自主性にゆだねられているため、面倒くさがる評価を怠る学生がいるという問題点もあります。そのため、Registration Officeは授業評価の期間中に、何度か授業評価を促す旨のメールを全学生に対して送付していましたし、教授は授業中に授業評価をするように呼びかけていました。

2. Winter Quarter 履修科目の様子

OE280 Paraxial Optics

この科目の履修者は、今までで最も少ない7人でした。授業内容は主にレイ・トレーシングとレンズ設計でした。両方とも計算が多く、大量の数値を扱わなければならないことから、授業では各自コンピュータでスプレッドシートを作るように指示されました。2回行なわれた定期試験は、コンピュータを持ち込み、スプレッドシートを使って解答する形式でした。期末試験は、筆記試験ではなく、レンズ設計のソフトを用いて、3つのレンズを評価するというtake-home形式のものでした。レンズ設計ソフトは試験の1週間ほど前に配られ、授業中に教授が簡単なデモンストレーションをしていました。しかし、レンズの評価が出来るまで使いこなすには付属のマニュアルを読む必要がありました。マニュアルは全部で400ページほどありましたが、授業と重複する原理の解説やレンズ評価以外の項目を読み飛ばせば、1週間ほどで何とか使いこなせるまでになりました。提出期限は期末試験の週だったので、この難題と帰国準備を同時に進めなければならず、正直なところ、最後のレポートとして満足する内容に仕上げられなかったのが残念でした。

OE393 Fiber Optics and Applications

この授業では、光ファイバの導波原理から、光ファイバの作製方法、損失、計測方法など、光ファイバ全般についての内容を習い、その内容に付随した実験が毎週行われました。この実験のレポートでは特に理論値と実験値のフィッティングと誤差の計算について厳しく評価されました。最後

の2回の実験はミニプロジェクトとして、グループごとに割り当てられたひとつのテーマについて実験を行いました。私たちが行ったのはロイドミラーという干渉計を用いて、光ファイバのクラッドと呼ばれる部分の半径を計測するというものでした。他のグループの実験は、光ファイバ中のスペクトルによる光強度減衰の測定、OTDRを用いた Moench Hall (授業や実験が行われる棟)の光ファイバネットワークの評価でした。どのテーマも興味深いですが、私のグループのテーマは、光学の醍醐味である干渉計だったので、興味を持って取り組むことが出来ました。実験の結果は最終週にポスターセッションの形式で発表しました。驚いたのは、他のメンバーは事前に何の打ち合わせも練習もすることなく、本番に臨んでいたことでした。しかも本番では実験の内容を自信たっぷりにきちんと説明し、教授の質問にも答えていたので、さらに驚きました。メンバーの中には、「今日はあと2つプレゼンテーションがある。」と嘆いている人もいましたが、このようにさまざまな科目でプレゼンテーションが行なわれる中で、少ない準備期間でも実のある発表が出来るようになるのだらうと思いました。

2. 派遣留学の感想

学習面

以前の月例報告で述べているように、本来私は電子工学科なのですが、ここローズ・ハルマンでは光学を専攻していました。私の研究室では光を使った研究をしているので、是非研究に役立てようと思ったからです。物理などの授業で多少の知識はありましたが、主専攻でない科目を、しかもたった2学期間他の学生と同じように取ることは無謀だったかもしれません。しかし、応用的な分野までは完全に理解していないものの、光学の基礎と呼べる部分はしっかり学んできた自信があります。

授業は始まってすぐのときは、教授の話が聞き取れないことが度々あり、癖字の板書を解読するのにも四苦八苦していました。教授はよく「わからないことがあったら、いつでも来なさい。」とおっしゃっていたので、教授のオフィスにはよく質問に行きました。教授は大抵の時は質問に応じてくださいました。その懇切丁寧な指導と、フレンドリーな態度に、「教授のオフィスとはこんなに訪ねやすい所だったのか。」と感銘を受けました。

実験も最初のころはついていくのがやっとでしたが、次第に「こうしたらどうだろう。」といった提案が出来るようになりました。私はアイデアを出し合い、試行錯誤することが好きで、アメリカの大学でも出来たらいいと思っていましたが、活発な意見交換とまではいかないものの、ある程度できたということは誇りに思いますし、実際やっていてとても楽しかったです。

ローズ・ハルマンを離れる前日にお世話になった教授に挨拶に行ったのですが、その際、学系主任の教授に、「B.S.取りにまた戻って来い。」と言われました。きっと社交辞令でしょうが、それでも私は嬉しかったです。

学生生活

この6ヶ月間は、勉強が主で、同じ寮のフロアのチームで平日の夜に行なわれるサッカーなどの試合には参加できませんでした。アメリカの大学教育を受けることは十分でしたが、アメリカの学生生活を体験するという面では不十分だったかもしれません。入部したマーシャル・アーツ・クラブも最初のうちは参加できていたのですが、活動日の翌日がレポートの提出日となることが多く、冬学期に入ってからほとんど参加することが出来ませんでした。しかし、このクラブで知り合った友達から友達の輪が広がっていったので、入部してよかったと思っています。

寮の部屋は3人部屋で、集団生活の経験がほとんどない私には少し苦痛でした。ルームメイトはこうした生活に慣れているようで、夜中他の人が勉強中で部屋が明るくても熟睡していました。私

はルームメイトのような技は出来ないと思っていましたが、帰国するころには昼でも夜でも眠られるようになっていました。慣れとは恐ろしいものです。

アメリカ文化

休暇中は、サンクスギビングと年末あわせて6都市を一人でまわることができ、アメリカのいろいろな地方の人間や文化を見ることが出来ました。メンフィスのアグレッシブなホームレス、ニューオーリンズの旨い飯、アトランタのフレンドリーなホームレス等等、旅行期間は大学にいた時間よりずっと短いはずなのですが、大学生活と同じくらい印象に残っています。またいつか訪ねてみたいと思います。

帰国して間もない今、ここで述べた感想は、留学を終えた達成感や、友人・知人との再会で高揚した感情が入り混じり、自分の中で美化してしまっている部分が多少あるかもしれません。この半年間の短期派遣留学が自分にとって本当に有益だったのかという判断は、これからの人生を送っていく中でゆっくり判断したいと思います。

最後に、この派遣留学プログラムを提供していただいた方々、参加を許可していただいた方々、留学中に支援していただいた方々に心より感謝致します。